

都市祭礼「仙台七夕まつり」の成立と変容

阿 南 透*

1. はじめに

仙台七夕まつりは、毎年8月6～8日の三日間、宮城県仙台市中心部で開催される都市祭礼である。東北三大祭の一つとして知られ、全国各地で行われる七夕まつりのうちでも、伝統と有数の規模を誇る。本稿はこの行事を取り上げ、都市祭礼としての仙台七夕まつりの確立期から、戦後の転換期までの変容を考察するものである。

民俗学の分野における七夕研究は数多いが、そのほとんどは七夕の起源と、行事内容の多様性に関するものである。一例を挙げれば、田中宣一は「七夕まつりの原像」と題する論考で、七夕まつりの性格を5つに整理する。①牽牛・織女二星の相会を祝うもの、②技芸の上達を祈るもの、③農耕儀礼的側面、④子供などによる小屋行事、⑤水による穢れの祓除。また盆行事の影響も指摘している。そして中国から伝えられた星合伝説が伝播する過程でさまざまな行事を吸収したと推測する[田中1983]。しかしこうした研究は、大都市の七夕まつりが「商業振興」を目的に行われている現状を視野の外に置いている。

そこで本稿は、仙台七夕まつりを、主として商業振興と観光の視点から考察するものである。仙台七夕まつりは日本有数の祭りであるにもかかわらず、過去の著作は七夕の由来や伝統の紹介が中心であり、近代の変化についての研究は多くなかった。ようやく最近になって近江恵美子が、仙台の近世の七夕と、大正末の復活から戦後にかけての様子を詳しく紹介した[近江2007]。また高橋綾

子・初沢敏生は、民俗行事の七夕が観光イベントに変容したことを指摘し、1980年代以降、中心商店街ではアーケードの設置が行事に変化をもたらしたこと、観光客の来ない周辺商店街でも七夕への取り組みが見られることを述べている[高橋・初沢2003]。本研究は、これらの先行研究を尊重しながらも、仙台七夕まつりの特徴でありながらあまり取り上げられていない「観光化」を中心に論じていく。

この行事は近世から続くものではあるが、一度衰えた後、1926(大正15)年に商店街の装飾に採用され「復活」したことを転機に、数年のうちに盛大な行事に発展したことが今日の隆盛につながっている。本稿は、仙台七夕まつりの「復活」を都市祭礼としての「成立」と捉え、次の転換点である1962年に「東北三大祭」ツアーが始まるまでの変容を考察するものである。

資料については、特に戦前の仙台七夕まつりについての文献資料が少ないため、仙台発行の東北ブロック紙『河北新報』と、戦後については『朝日新聞宮城地方版』の記事を主として使用した。新聞記事に基づく考察に限界があることは事実であり、今後とも資料収集に努めたいと考えている。

2. 戦前の七夕

大正末の七夕

仙台の七夕が大きく変化するのは1926年であるが、その直前の七夕の様子を、1924(大正13)年の『河北新報』から引用してみよう(引用に当たっては新字・新かなに改め、句読点を補った。以下同じ)。「七夕祭は仙台地方の年中行事であり、名物とされたもので、各町これを競うの風があっ

2008年11月28日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 民俗学

たが、時勢の推移はその雅やかな風習も、次第に廃れ、世知辛い世の中となった近年は、その名残を止めるに過ぎぬが、それでも六日の夕から七日の暁かけて、市内の軒並には、五色の紙に彩られた笹竹が飾られる」（河北新報 1924. 8. 7）。

『河北新報』によれば、次の 1925 年も似たような内容である。「たなばたは以前ほどではなく、飾っても万事は節約の世の中とあり、ごく簡単にお茶を濁している。それでも肴町、虎屋横町、東一、ずっと端手に入っては遊郭なんぞ、三日も前から一家総がかりの趣向にパッと目をさまさせたのはうれしい。二日町を除いて国道筋河原町までは至って振るわず、国分町、南町も、軒並を銀行会社の占有するところとなってポツポツの平凡意匠、柳町から北目町、荒町が却って妍を競う」とある（河北新報 1925. 8. 7）。

このように、市内各地に五色の紙で飾られた笹竹が飾られているものの、「名残を止めるに過ぎぬ」「以前ほどではなく」など、行事が廃れているという意識で書かれている。「ごく簡単にお茶を濁している」とか、「三日も前から一家総がかりの趣向にパッと目をさまさせたのはうれしい」という表現からは、量が減ったというより凝った趣向が減っているという、量より質の低下を嘆く記事が書かれている。

1926 年の復活

七夕の転換点は 1926 年である^①。

この年、七夕祭りの 8 月 6 日に各商店街では、中元の売出しも兼ねて連合大売り出しを実施した。その中で大町五丁目の全戸が七夕の竹飾りを掲揚し、飾り付けの審査を行い、特等から 4 等までを表彰をして評判を呼んだ。その経緯を順にたどってみよう。

『河北新報』には、まず 7 月 23 日付に「大通りと東一、競争の七夕飾り——どっちが勝つか」という見出しの記事が出ている。

「仙台の一名物とも称すべき七夕祭は八月六日夜を以て行われるので、この機を利用する大売り出しは例年各商店にて開かれ来たったが、今年は町内連合の催しがそちこちに計画されている」と

し、まず「大町五丁目では、六日夜より七日夜にかけて七夕祭の連合大売り出しを行う決議が出来たので目下準備中だが、たなばた祭の幟その他の装飾品は両夜を通じて飾り置くもので懸賞付きという仕組みなので定めし面白いものが現れるであろう」と、大町五丁目の取り組みを紹介する。それに続き「此の企てを関知した東一番丁では、たなばた祭はこっちが本元なのに大仕かけな装飾売出しをやられてはお株を奪われる恐れがあるとて俄に元気付き、破天荒なたなばた祭をやったのけよとの相談が纏まったというから、例年に比類のない笹のぼりが東一街をおおうことであろう」と、本元を自称する東一番丁を紹介する。さらに「この両町の催しがだんだん各方面に伝播すると共に、まけてはならぬとの競争心が引き起こされるので別趣向な売出しをと町内会で苦心しているのが決して少なくないから、今年のたなばた祭は言わば各町の共進会といった形になるのでであろう」と締めくくっている（河北新報 1926. 7. 23）。

すなわち、七夕の時期に中元の連合大売り出しがあり、七夕飾りは大売り出しの装飾品という位置づけがされている。そして、大町五丁目の取り組みに対し、東一番丁は「こっちが本元」と称している。これは、仙台随一の繁華街としての誇りからくるものであろう。ただし東一番丁は大売り出しが紹介されるのみで、東一番丁の装飾は、以後の新聞を見てもはっきりしない。

7 月 29 日付では、各町の大売り出しの計画を紹介している。

まず南町を「南町通りのよる市は会期一ヶ月間に亘るとともに、人車道の間道を利用して規模の大きい夜店をやろうというのだから十二間幅の街路と相対して新しい試みの一つなのである」と紹介する。東一番丁は、「東一の連合大売り出しは全町一致の形式で派手に打って出ようとするのは勿論、場所柄だけに福引の景品が素晴らしくデカイのである」と、福引に着目する。次に「国分町四丁目の誓文払いの市場は従来東北方面に見られなかった企画なので一般の注意をひいたのは元より、町内でもこれで成功しなかったら今後連合売出しは見合わせようともて背水の陣を布いている」。

そして「大町五丁目の七夕市場は七月中の試験ですっかり呼吸をのみこんだので、今度こそは市内各町をアッと言わせようと意気込んで計画をしたので町内の装飾から店舗内の配置まで出来るだけの新意を試み福引においても従来の型を破ったところを見せるとのことだ」とする。さらに「新伝馬町でも大売り出しの株はこの方にありとばかり全町一致の態度に出んとしているし、元寺小路でも新進の商業町として種々と企画を進めている」と、他町の様子を紹介する（河北新報 1926. 7. 29）。

以上から、大売り出しの企画として、南町は夜市、東一番丁は連合大売り出し、国分町は誓文払い、大町五丁目は七夕というふうに、各町独自の取り組みがなされ、七夕はその一企画であったことがわかる。

当日の様子は次のように紹介されている。6日夜は、「新伝馬町から岐阜提灯の大町五丁目に入り更に赤旗の立ち並ぶ東一番丁の人ごみに吸われて行き、やっとの思いで誓文払のあっさりとした中に趣きを見せた国分町四丁目へでていくといった形だ。よる市で新市場を開拓した南町通りは新案のボンボリで珍しい灯影を見せたもので、此所は無料の夜店町というためか各種各様の賞品が出並んでしかも売れ行きは案外によろしいと喜ぶものが多いようだ」。さらに「七夕祭りの人出は例年のことではあるが本年の如く連合大売出しの催しは未曾有のことにも属する」（河北新報 1926. 8. 7）。

8日の紙面は、「連合売り出しの夜、殆ど空前の賑い——雨にもめげず群衆の街路を埋る人波」という見出しの下に、各地の様子を報じている。

「六日の夜は空前の人出で人の波黒山の動きで東一番丁から大町にかけては交通整理の手段も尽きるほどであった」と全体をまとめたあと、まず東一番丁について、「東一番丁の連合市場は雑踏の中心点であるだけ八時頃の出盛りには身動きもならぬほどで、子供つれの婦人連などはいやでも店内に避難せねばならぬ。店舗内に入って見渡すと大割引に景品付けの商品が美しく飾り立てられているから矢張り購買心が角を出すといった姿で、どこの店をのぞいても一方ならぬいそがしさであっ

た」。国分町は「四丁目の誓文払いの市場へ出てみるとここは七夕祭りの影は殆どなく、両側に美装した半露店が所謂誓文品と見切り品とを一例に並べているが、黒山と集まりたかった人々は何れも品々の物色に没頭され折から降り出して来た小雨などは物の数ともしそうにない。南から北からさては東一の雑踏圏から身をのがれたともいいそうな人々は漸く国分町に入ってホッとする有様だから、勢い買い物はここですることとて、同夜の売れ行きはたとえ小雨の邪魔されたとしても決して予期を裏切るものではなかった」（河北新報 1926. 8. 8）。

そして大町五丁目は、「七夕祭りで当夜の花形といわれただけあって、通路は人でうずまり歩くのか運ばれるのかその当人さえも不可解なほどなので宵の中は商店側の賑わいは少ないように見えたが、さて降り出した雨で幾分人波がとけて物色に余裕を得るようになるとどの店も一様に客足がついたから、一時にいそがしさの殺到という形を呈したのである」。

さらに新伝馬町と南町通りの様子が続く。そして最後に「連合大売り出しが人気をひいたのかたなばた祭の行楽が人足をさそったのか、同夜の人出ほど大通筋を万遍なく埋めたことは仙台市としては全く空前のことに属するのであろう。大町も芭蕉の辻から五丁目まで東一番丁は南町通りから定禅寺通りまで、それに国分町通りとは八時を中心として警官や自警団員の汗みどろな健闘も容易に役立つことなく只赤い提灯が人波の上にゆらぐのみであった。そのころ降り出した小雨に流石の人波も多少はゆらぎ出したが、然し群集心理に支配されている多数者は雨などに驚く筈がなく幸い売り出し中の雨傘を片っ端から買い求めてなおも悠々と練り歩くから、十時十一時になっても容易に閑寂な街路をば示さなかった」（河北新報 1926. 8. 8）と、賑わいをまとめている。

「仙台七夕まつり」の成立

1926年に大町五丁目で復活した七夕祭りは、1927年には大町四丁目も巻き込み、前年同様に開催されたようである。これに対し東一番丁は福

引き大売り出して対抗したようだ。

そして1928年、商工会議所と仙台協賛会⁽²⁾が飾りを審査・表彰する「七夕競技会」が始まる。この年が七夕完全復活の年と見ることもできる。

この年の七夕を新聞報道からたどってみよう。まず、7月21日付『河北新報』には「今年の七夕——市内の中央筋をはじめ各町挙って賑やかに」の見出しで次の記事がある。

「来月六日夜に挙行すべき七夕祭りは景気直しの意味や大典記念の前祝いとして前年以上に盛んならしめんとする各町の意気込みは既報したのであり、且つは復活のため年々大努力を払っている大町五丁目の共同会が行わんとする競技会の計画をも併せ報じたのであった。然して各町が前記の心組を以て大規模の企画に及ぶのであるから市内殆どこの挙に賛しないものはないであろうが、共同会では更に大町通りを一斉競技に引入れ空前の七夕祭りを敢行せんとする計画をたて、目下大町四丁目や新伝馬町や名掛丁に対して勧誘の歩をすすめている。尤もこれ等の各町は例年中々の奮発を以て七夕祭りをやっているものであり、東一番丁の如きもしばしば競技会を催して仙台名物の鼓吹につとめているのだから大町五丁目側の提唱が幸いにして容れられるとそれこそ仙台空前の七夕祭りが行われるのであろう。若しこの企てをして大町五丁目の共同会のものみとせず、市内商工業の開発に資する一施設とするならば（昨年は東京より団体の観覧があった）市産業課か商工会議所か先達となるのが時宜の策であろうし又はこれ等の公共団体が後援となり仙台協賛会をしてこの任に当たらしめることも一方法であると思われる。何れにするも本年の如き目出たき年柄で大博覧会のあとをうけた市場に対しては、全国に名を成している名物の鼓吹を盛んにし以て他方面よりの入市者を迎えることは最も有意義の計画であろうというものだ」（河北新報 1928. 7. 21）。

ここでは、大町五丁目飾りの出来栄を競う競技会に周辺町を勧誘しているという。また、周辺町も七夕祭りをやっているとか、東一番丁はしばしば競技会を催しているとの記述もある。そうすると大町五丁目の企ては決して独自の思いつき

ではなく、数ある七夕復興運動の一つであり、それがたまたま時宜を得て発展した可能性もある。こうした点の解明は今後の課題としたい。

なお、記事に「本年の如き目出たき年柄」とあるのは、昭和天皇の大礼の年であるため、大博覧会とは、4月15日から6月8日まで仙台で開催された東北産業博覧会のことである⁽³⁾。

この段階では大町五丁目に加え、東一番丁と国分町が競技会を実施すべく準備を始めたとある。七夕の範囲が複数の町に広がっていったのである。

そして7月29日の記事に、仙台商工会議所と仙台協賛会が登場する。「市内の各町が歩調を揃えて売出しなり特殊の催しなりを企画したことは全く空前の事に属するので、これが助成の施設を行うべく仙台会議所で攻究中であった矢先、仙台協賛会では七夕祭りを兼ねる中元大売り出しの各町を奨励するため町単位の優秀者に名誉大賞牌を授与しよう山田会長の名において伊沢会頭宛てに建議書を提出するに至ったので、会議所では取敢ず三十日の常議員会に付議して建議書の採択をなしこれが施設に当たることになった。商工会議所の賞牌は前記の如く町単位の審査であって一年毎にこれを返還せしめ、更に優秀町に授与する制にするであろうから相当の価格にて製作するは勿論、審査に当たりても各方面より人選して公平を期することであろう」（河北新報 1928. 7. 29）。

ここに至って仙台商工会議所と仙台協賛会が行事に関与し、従来はなかった審査と表彰を実施することになる。つまり、単に竹飾りを飾る行事から、飾り付けの出来栄を審査・表彰する競争へと行事が発展したのである。そして、商店街の行事から市をあげた行事へと組織的変容を遂げることになったのである。

8月8日付には審査結果が掲載されている。「仙台会議所と協賛会との審査員側は山田副会頭を審査長として二回の巡視をした結果次の如く決定し、同九時半会議所楼上にて賞品授与式をあげ会頭代理として山田副会頭から左記の通り賞品および賞状を授与し受賞者総代として大町五丁目の会長佐々木重兵衛氏が謝辞を述べて引き取った。

一等賞 会議所賞として賞状及び優勝盃、仙台

協賛会賞として賞状 大町五丁目
 二等賞 仙台協賛会賞 国分町四丁目
 三等賞 同上 東一番丁一の組
 四等賞 同上 東一番丁二の組
 五等賞 同上 虎屋横町

以上は町単位の競技であったが、各町においてもそれぞれ個人賞を授与すべく審査員をあげて銓衡したもので大町五丁目の如きは一等より五等まで三十名を薦賞し国分町全体では一等より五等まで十五名を選抜した」（河北新報 1928. 8. 8）。

同日の紙面には、今回の経緯を次のようにまとめている。「七夕祭りは古来仙台名物の一つであったが近年何となく衰微に傾いたのを慨し、大町五丁目が率先して復興に努力した結果遂に本年は仙台協賛会の策動により商工会議所も奮起するに至ったもので、最早全国的に名物の名を擅にすることが出来るまでに立ち至った。参加各町の催し物は何れも最前の努力を払ったため意匠考案ともに傑出したものが多く然もその間に古典的な味を含めることを忘れないのは仙台名物の名にそむかないものだ。なお七日は終日そのまま飾りつけて一般の縦覧に供する申し合わせであったから早朝これ等の諸町は可なりの賑わいを呈した」（河北新報 1928. 8. 8）。

繰り返しになるが、この年の重要な変化をまとめてみよう。まず第1に、仙台商工会議所と仙台協賛会が行事に関与し、市内各町に参加を広く呼びかけた。このことで、それぞれ独自に行っていた各町の七夕が組織的に運営され、中心街を挙げての祭礼になった。第2に、七夕競技会という審査・表彰制度を設け、町対抗の仕組みを作った。このことは町の競争を促進し、競争が祭りを発展させた。

ここで仙台七夕まつりが完全復活した。あるいは、都市祭礼としての七夕まつりが「成立した」と見ることが出来るであろう。

商店街の対抗意識

審査と表彰が始まった結果、賞を目指して商店街が対抗意識を持ち始めた。例えば 1930 年には、競技会への意気込みに触れた記事がある。すなわ

ち、3回連続優勝すると大銀杯を永久保管できるため、過去2回優勝した大町五丁目は秘策を練って三度目の優勝を目指しているといい、一方、昨年惜しくも大町五丁目に敗れた国分町四丁目は、今年こそ優勝と意気込み、祝勝慰労会の予算まで出来ているという。なお、審査結果は8日付に掲載されており、大町五丁目が三年連続優勝し、大銀杯を永久保管することになった（河北新報 1930. 8. 6）。

また 1931 年には、河北新報社も七夕祭飾付競技会に賞品を出すことが紹介されている。すなわち、各町団体競技の賞品は、仙台商工会議所と仙台協賛会から優勝旗、河北新報社から優勝盃を授与し、さらに個人競技として、各町の最優秀作品にも河北新報社から優勝盃を授与するという（河北新報 1931. 8. 1）。このように河北新報社が競技の後援に加わった結果、飾り付けの準備の様子も報道され、競技への興味をかき立てた。なお、審査結果は、大町五丁目と東一振興会が同点のため決選投票を行って東一振興会が一等になった（河北新報 1931. 8. 8）。

審査への関心が高まったことから、1932年の競技会は、商工会議所、仙台協賛会、河北新報の共催で、団体賞、個人賞の二本立てで審査が行われたが、事前に「審査規程」が発表された（河北新報 1932. 7. 13）。それによると、団体賞と個人賞では審査基準が異なっていた。団体賞は「笹竹に紙その他の細工品を配したる純粋の七夕飾りについてのみ行う」と、伝統的な飾りを重視するのに対し、個人賞は「笹竹による七夕飾り以外の飾物について審査する。審査の標準は奇抜なる思いつきと、細工の完備をもって優位とす」と、創意工夫を重視することを述べる。このことに関連して7月16日付には、「金さえかければ『一等』もう除かれよう——邪道から正道に戻す審査規定、七夕競技会の意気込」という記事がある。ここでは特に団体競技について「従来の如く飾り付け当日まで各戸策を秘して思い思いに作成し両隣との飾り付けの間に何等の連絡も調和もなく、只けばけばしさを争うといった香ばしくない傾向は全く除去され、一町内がうす緑に赤を点在せしめると

いうが如き全体としての色調に重点が置かれる」（河北新報 1932. 7. 16）と、全体の調和を強調する。さらに7月28日付でも2つの審査基準の違いを述べ、「要するに個人競技では各個の着想なり表現なりを思い切り発揮させると共に、団体競技では一町心を一にし町全体を統一ある美観を以て飾らせようというのが本年からの競技会の理想であり指導精神であると見てよかろう」（河北新報 1932. 7. 28）としている。

1932年の審査の結果、団体競技では、1等は昨年に続き東一振興会であった。1等から5等まで12町が表彰の対象となった。個人では鈴喜陶器店が1等で、5等まで10店が表彰された。また、審査委員長による報告が掲載されており、飾り付けの出来栄えが進歩し、得点が接近していることを述べている（河北新報 1932. 8. 8）。

1933年の装飾競技会は、団体競技で東一振興会の三連覇がかかっていたが、大町五丁目が3年ぶりに一等となった。個人競技は大阪屋洋服店が初の一等となった。このような審査と表彰が、商店街や個人の対抗意識を高め、飾り付けへのこだわりが年々増加し、行事を発展させたのである。

観光化

1929年からは日程が二日間になった。これに対しては一つだけだが批判の記事があった。「仙台の七夕祭を、一夜だけの飾りとして川に流すのは如何にも惜しい。これは森正隆知事でなくても、出来るなら二日か三日、そのまま飾っておいて充分眼を楽しめたいものだと思う」と断った上、「仙台商業会議所や、仙台協賛会などの肝煎りで、今年からこれを六日の晩と七日の夜と二日続けて催すことにしたのも、なる程とうなずかれる」としながらも「けれども、七夕祭は、一夜限りであるところに趣がある」とする。また「今更、織女星の祭事の由来などを考えるに及ばないが、盂蘭盆会は三日、彼岸は七日、そうして七夕祭は一日と古くから決まっている」と、行事の由来と関連づけて伝統的な日程を強調する（河北新報 1929. 8. 7）。

1929年からは祭り終了後に、見物人の数につ

いての報道が恒例になった。1929年は「七夕祭見物の外来者約二万人」という記事があり、見物客を1万7,8千人と推測している。根拠は、「市外からの観覧者の概算として省線七千人、電鉄五千人、秋保電車と仙台鉄道で約三千人、これに徒歩を加えたら一万七八千人」とのことである。なお、この記事の末尾は次のようになっている。

「七夕祭りは仙台名物として全国的に名を成すに至ったから、明年よりは更に何等かの催しをも加え只に県下若しくは隣県よりのみでなく広く他地方よりの観覧者を吸収して市内の商業発展に資したいと有志連は早くも計画に着手した有様だ」（河北新報 1929. 8. 9）。こうして観光客誘致計画のあったことがうかがえるが、内容はわからない。

1930年には、観光化の兆しとでも言うべき記事がある。すなわちこの年は、宮城電鉄、秋保電鉄、仙台鉄道が七夕見物者に割引をして便宜を計ったため、近在からの来仙者が多数に上った。また東京からも個人として見物に来仙した人がかなり多かった。このため「仙台商工会議所と仙台協賛会とは、この盛観を市民だけに見せて足れりとするのは甚だ遺憾に思い、来年からは仙台及び東京両鉄道局に依頼して、七夕祭見物の団体を東京は勿論東北各地から募集したい希望を持っている」とのことである。これに対し「国際観光局が設置された年だけに、鉄道側でもこの請願に先手を打って、来年は団体を募集する計画が既にできているともいわれる」という予測が記事にある（河北新報 1930. 8. 9）。この年は記事にあるように、国際観光局が設置され、国の観光行政がまさに大きく転換した時期である。この年に仙台でも観光化への模索が始まったのである。

1931年は、7月19日の「今年の七夕」という記事に「本年五月三越における東北展覧会に本社が七夕を飾って広く東京に紹介をしているので東京からも見物が多く入り込む事を期待されているが、仙台協賛会と商工会議所では団体の来仙を希望し佐々木理事が十八日朝仙台鉄道局を訪問しその援助を求めた」（河北新報 1931. 7. 19）とある。観光化へ具体的な動きが出た年である。その成果かどうかは不明だが、「七夕祭見物に東京日本橋

の株式会社仲買店から百名の団体が来仙するが、七夕祭だけを目あてにくる団体としては最初の団体である」（河北新報 1931. 8. 6）との記事がある。

1932年には、7月に臨時列車の計画が紹介されている。「仙台運輸事務所によって計画された鉄道最初の七夕祭見物列車計画はその私案当時から非常な人気を叫び、更に計画の発表を見るに及んで、恰もその頃は些か農閑の季に入ること、或いは旧盆を前に仙台への買物といったような条件が、凄まじく地方の人々の出足を促進して、七夕、七夕と仙台行きを希望するものがおびただしく（中略）三千名の定員が或いは倍加するとも見られている」と人気の程を報じる。具体的な計画は、「是非、市を挙げて熱狂のクライマックスに達する午後九時十時あたりの大雑踏を紹介したいのだが帰宅の時間が遅くもなるし、かつ土地不案内の人々に取ってはこの大群衆に捲き込まれて列車時刻に間に合わぬことがあってはとの心配から、大体この団体客に対しては六時七時八時頃の七夕飾を見物させ、早い所で一関戻りの仙台発午後八時四十分、遅くとも白石戻りの仙台発午後九時二十分で切り上げさせたいとの意見を持っているが、団員の希望によっては十分七夕祭の賑わいを見せた上、午後十一時ころの仙台発列車を仕立てても好い意見を持っている」としている（河北新報 1932. 7. 12）。8月4日付には、10往復が計画され五千名の団体が青森、秋田、岩手、福島などから仙台に来るだけでなく、さらに増車の注文が出ているという。ただし8月5日付には、「七夕列車」として、一関、小牛田、白石、原ノ町、中新田から5往復半の時刻が掲載されているので、実際の本数はこちらが正しいであろう。この臨時列車の運転範囲は宮城県内とその近隣に限られている。農閑期、旧盆前に県内から買物を兼ねて見物に来る人々に便宜を図るのが主目的であったと思われる。なお8日付には、8月6日の仙台駅乗降客が21,499名で、ここ5、6年ない大混雑ぶりであったとしているから、多くの乗客で賑わったのであろう。

この臨時列車は、1933年も仙台鉄道局管内の一関、小牛田、白石、原ノ町、中新田から6往復

半が運転された（河北新報 1933. 8. 3）。以後も恒例になり、戦争のため中止されるまで毎年同程度の本数が運行された。

他市への広がり

1931年からは、仙台の影響を受けて盛んになった近隣都市の七夕が紙面に登場する。1931年には古川の七夕の予告記事が載っている。「古川商店街、景気挽回の催し——七夕と旧盆を期して懸賞付の宣伝計画」という見出しの下、「すたれ気味の商店街に景気を付けろ——の世論が高まって、保守的な古川町が動き出し、商工会の肝煎りで七夕、旧盆には同始まって以来の大々的催しをなすことになった」との書き出しに続き、七夕祭りに装飾競技会を開催すること、旧盆三日間には盆火を焚き、手踊りの余興と花火の打ち上げで景気を付けることが記されている（河北新報 1931. 8. 9）。

古川の七夕は、1932年には河北新報が後援することになった。「東北地方では仙台に次いでその名高い古川町の名物七夕祭はいよいよ来る八月七日（旧七月六日）盛大に挙行されることになった。昨年までは商工会、町役場主催で催して来たが、本年は特に本社後援の下に挙行されることに決定し、全町は早くも例年のない活気を呈している」（河北新報 1932. 7. 30）。そして七夕祭りの様子と審査結果が8月9日付で報じられているが、同じ紙面には「塩釜町七夕祭、深更まで賑わう」という小さな記事も載っており、「仙台の景気になぞらい」飾り立てたと記されている（河北新報 1932. 8. 9）。

1933年頃から、仙台、古川以外の七夕についても記事が出始める。この年は盛岡の南部七夕祭の記事がある。「仙台の七夕祭が全国的に有名となり観覧者が各方面から集まって市況を賑わすことに一大衝撃を受けた盛岡市内の各商店街は、仙台市と同じく旧藩時代から年中行事の一つとなっている七夕祭りを復興して仙台に劣らぬ南部七夕祭を現出すべく努力し、昨年の如きは相当の成果を収めたので、今年は過般来各商店街が主となって計画し早くも笹竹の配給準備も整っており、六日夜の賑わいはまた格別だろうと期待されている」

(河北新報 1933.8.5)。また古川についても、「見物団体を仙台から逆輸入——連合売出しも開く大意気込、近づく古川の七夕祭」という見出しの下に、8月26日(旧7月6日)に行う古川七夕祭は、今年は仙台と日程が離れたので、仙台からも客を呼び込もうと計画中と報道されている(河北新報 1933.8.6)。1935年には、古川のほか桃玉郡飯野川町(河北新報 1935.8.3)、伊具郡藤尾村金津(河北新報 1935.8.4)、白石町、大河原町、築館町、角田町(河北新報 1935.8.6)、気仙沼(河北新報 1935.8.7)が紙面で紹介されている。

戦争による中断

1937年は、行事こそ例年通り行われたものの、戦争の影響により新聞記事は大幅に減ってしまう。内容も「仕掛物は明春開催する振興博覧会を取り上げたものが最も多く、また時局物の北支事変にちなんだものも可成り見受けられた」(河北新報 1937.8.7)とあるように、戦争の影響が色濃く見られた。なお、「振興博覧会」とは、1938年4~5月に仙台市主催で開催された「東北振興大博覧会」のことである。飾り付け競技会も実施されたが、結果は新聞紙上には掲載されていない。そして1938年からは、日中戦争の本格化により「七夕まつり」は中止になった。

3. 戦後の七夕

復活

仙台は空襲により被害を受けたものの、戦後は1946年に早くも一部で七夕飾りが復活する(東一番丁では52の飾りがあったという[番丁詳伝編集委員会 1987:156])。1947年には8月5日の天皇の巡幸に合わせ、5~7日の3日間盛大に行われた。ここに仙台七夕まつりは本格復活し、年々盛んになっていく。

審査も1947年から復活するが、1950年からは全市を第一地区(中央部)と第二地区(周辺部)に分けて審査するようになる(ちなみにこの年の審査基準は色調、伝統性、宣伝性、独創性、努力の五点であった)(河北新報 1950.8.12)。これは、

周辺部の商店街の参加を促進するため、飾りに金をかける繁華街の商店街とは別に審査することにしたのである。

観光化

1949年には商工会議所で七夕の県外宣伝に力を注ぎ、観光客誘致に努めることになった[仙台商工会議所七十年史編纂委員会 1967:267]。このため東京に七夕飾りをするにせよ、1953年には銀座四丁目と秋葉原駅(河北新報 1953.7.6)、1954年には上野駅(河北新報 1954.7.25)、1955年には東京駅と浅草商店街(河北新報 1955.7.9)などに飾った。またこの年には、各所から幹旋依頼が舞い込んで、「このところ仙台七夕は東京に移った感じである」(河北新報 1955.7.9)という様相であった。

仙台七夕まつりを訪れる観光客は、戦前は宮城県と近県からがほとんどだった。戦後は集客圏が広がり、特に東京からの観光客が目につくようになる。

東京からの団体客の最初の記事は、1952年に、東京から臨時列車でアマチュア・カメラマン五百名が来仙し(団長は東京写真材料商協組組合長村上菊松)、塩釜、松島と七夕まつり風景を撮影したというものである。「一行は五日午前五時二十二分仙台着、直ちに塩釜に向い、船で松島湾内を回遊、瑞巖寺、塩釜神社などを撮影後午後零時二十分仙台着、レジャー・センターで岡崎市長、吉田会議所会頭の歓迎パーティーに臨む。ここでさんさしぐれ、はっとせ、盆踊り、田植踊りなどの郷土民謡を観賞、午後二時から七夕撮影を行って同八時七分仙台発列車で帰京するという」(河北新報 1952.8.4)。何とも熱心な接待ぶりである。

仙台鉄道管理局では、戦前から七夕期間中の臨時列車を運転していたが、これは戦後にも引き継がれた。1959年には、5日~9日の5日間に東北本線、常磐線、仙石線にのべ53本の臨時列車・電車を運転し、また定期列車にものべ219両の客車と22両の気動車を増結した。さらにこの年は、特に東京からの見物客のため常磐線に臨時急行「たなばた」号を運転した。下りは上野駅 10:30

発、仙台駅 17:03 着。上りは仙台駅 15:30 発、上野駅 22:20 着で、下りは 5~8 日、上りは 6~9 日の運転であった（河北新報 1959. 8. 1）。

こうした活動の結果もあり、期間中の人出は増加の一途をたどった。人出は天候に左右されるとはいうものの、各年の主催者発表によれば、1948 年には十数万人であった人出が、1950 年に 30 万人、1954 年に 100 万人、1956 年に 120 万人、1958 年に 150 万人、1959 年に 160 万人、1960 年に 170 万人と増加の一途であった。

新聞報道では、1955 年頃から、こうした人出とともに、「落とした金」が毎年の関心事として報道されている。1956 年には「商工会議所の推定によると三日間の人出ははじめて百二十万（去年は八十万）、落ちた金は約三億三千万円。同会議所では『人出は見込みより少なかったが、落ちた金は一割方多い』（朝日新聞宮城地方版 1956. 8. 9）。1958 年には「仙台七夕祭りはこの三日間でざっと百五十万人の人出を記録。去年を三〇%近く上回る七夕祭始まって以来のにぎわいをみせた。開幕前の予想がほぼ実現したわけで『五千万円をかけて二万本の竹飾りを林立したかいがあった』と関係者を喜ばせている。（中略）一人三百円として百五十万人なら四億五千万円が市内に落ちた勘定だ」（河北新報 1958. 8. 9）といった具合である。

こうして中心街の七夕の観光化が進み、観光客は増加したものの、市民の見物が減ったことが問題になった。1959 年、七夕期間中に国鉄は仙台駅の乗降客、売上げ新記録を記録したが、対照的に市バスと市電の売上げが減った。「3 日間の総決算では、電車の乗降客が 44 万 9903 人で、昨年より 1,885 人少なく、売上げは 486 万 9 千円で 7 千円減ったのに対し、バスは 53 万 3,895 人（6,353 人増加）、835 万 2,900 円（156 万 7 千円増）にすぎなかった。特にバスは昨年より 32 両も新車が増えており、また昨年末の料金値上げで当然昨年の実績を大きく上回るものと予想していた交通局は全くの期待はずれ」（河北新報 1959. 8. 15）。この不成績の原因について、記事は市交通局の「肝心の市民が七夕見物に歩かなくなったため」

という見解を紹介している。つまり仙台七夕は全国の名物として観光客を集めている割には、お膝元の市民が毎年変わらぬ趣向に飽き、次第に出歩かなくなっているというのである。後に述べる一戸一本運動も、こうした傾向から影響を受けていると考えられる。

他都市への普及

仙台の七夕まつりに刺激され、戦前にも七夕まつりが宮城県内から岩手県、福島県の都市へと広がっていた。これが戦後になると、関東以西へとさらなる広がりを見せ始めた。このため 1951 年頃から、七夕の導入を検討したり、導入したばかりの都市から視察団が続々と来るようになった。仙台では商工会議所に事務局が置かれていることもあって、各地の商工会議所による視察が目立った。1951 年には水戸、日立、前橋、平塚、釜石などの各商工会議所から約 300 名（河北新報 1951. 8. 7）、1952 年には土浦、平塚、横須賀、水戸、会津若松、八戸、清水、四日市、神戸の九市からそれぞれ二、三十名ずつの視察団が来仙した（河北新報 1952. 8. 4）。また、1955 年には二十余の商工会議所から、七夕飾りの作り方、経費などの照会があったという（河北新報 1955. 7. 23）。

そうした視察団が押しかける様子が 1959 年の記事に見られる。「最近同じ七夕でめきめき売り出してきた平塚市からは、先に行われた同市の飾り付けて一位になった双葉洋服店の西沢祥貴さんから 11 人がかけつけて、飾り付けのアイデアを熱心に探究。静岡市からは同商工会議所の中村事務局長ら五人、千葉市からは会議所や商店街の代表 23 人と大部隊が押しかけ、客の誘致法からサービスまで観察していた。このほかお隣の岩手県岩手町商工会から 30 人、東京中野商店会から 30 人と、見物に名をかけた視察団はちょっと数え切れないほど。おかげで仙台商工会議所も、視察団接待専門の係員三人を置いて汗だく」（河北新報 1959. 8. 7）であったという。

こうして仙台を参考にした七夕まつりが各地に普及していく。こうした普及については、安城市商工課が 2003 年に、七夕まつりを開催する全国

100都市を対象に行ったアンケートが参考になる。それによると、七夕まつりの開始年は、「昭和26～30年」が23都市であり、これは「大正以前」の32都市に次ぐ数である。アンケートを分析した齋藤裕之によれば、伝統的な習俗が元になった七夕まつりは「大正以前」開始であるのに対し、「昭和26～30年」開始の方は商業振興を目的に始まっているという〔齋藤2003〕。齋藤はブームの理由を、「戦後、日本がようやく復調の兆しを見せ始めたころ、人々は星空に将来の経済発展の夢を託したのである」〔齋藤2003：67〕として、七夕の「将来の夢を託す」という行事内容が高度成長期にマッチしたと述べている。それはともかく、仙台への視察の殺到は、この時期の「七夕まつりブーム」の反映であることは間違いない。

こうした普及の結果、仙台でもそれらの存在を無視できなくなってくる。「仙台七夕まつりの第1回実行委員会が14日仙台商工会議所で開かれ、ことしも8月6・7・8の3日間盛大に行うことを決めた。全国的に有名なこの祭も最近各地で行われるため、とかく観光客を奪われる傾向もあるのでことしは宣伝も早めに行い、ポスターも全部で六千枚準備している」(河北新報1958.6.15)というように、観光面ではライバルに成長した他の七夕を意識せざるを得なくなった。仙台市の広報紙『仙台市政だより』でさえ、「県外の都市でも、近ごろ同じようにやっているの、ややもすると伝統のある仙台七夕が他都市に、ゆくゆくは負けてしまうのではないかと心配されています」(1960.8.1号)と記載しているほどである。

伝統の強調

戦後の七夕まつりでは、飾りの材料にビニール、プラスチック、ナイロン、セロハン紙など新しい素材を取り入れる動きがあった。このことから、新しい造形を目指すべきか、あるいは伝統を維持すべきかの論争を巻き起こした。

これについて、新聞紙上には郷土史家たちが伝統的な飾付を賛美した論考が掲載されている。

「昔は筐のかざりは短冊、吹き流し、紙衣、クズカゴ、巾着、千羽鶴の六種に限られ、これに七

夕線香を加え、なお夜間には竹の骨に紙を貼り彩色した水瓜行燈に灯を入れ吊す例であった。今のように無暗やたらににぎやかでありさえすればよいといったものではなかったから全市を挙げて奥ゆかしい統一せられた美しさがあった。その点から見て今の七夕はだんだん七夕の本質から離れてゆくのではあるまいかということが懸念されないものでもない」(三原良吉「仙台の七夕」河北新報1949.8.7)。

「昔は一口でいうと現在のように豪華、雑然としたものではなく、単純、風雅なものであった。全て和紙を使い青い筐に色とりどりの短冊が下がっているさまは本当に七夕らしい趣のあふれたものだった。またそれだけに繁華街には必ずしもふさわしいものではなかったようだ。衰退したひとつの理由はここにもあるだろう。一、二間の長い筐、星祭り、七夕祭り、天の川などと書いた原色和紙の短冊、同じく和紙で作った着物、巾着、くずかご、とあみ、吹き流し、千羽鶴、宝船(くす玉などはなかった)。それが懸賞というものに刺激されて復興しただけに、その後は本当の七夕とおよそかけ離れた色彩が飛び出してくるようになった。隣よりも立派にしようというので金銀のモールや紙テープ、つり縄から風船まで現れ、最もひどいのはクリスマス・デコレーションがそのまま七夕に登場してくるという有様だ」(柴田量平「仙台の『七夕祭り』」、河北新報1950.8.6)。

こうした郷土史家の言説にも登場する飾り物が「七つ飾り」と総称され、仙台七夕に固有の伝統として強調されていくことになる。すなわち「七つ具とは織女の紡ぐ糸から出た吹き流し、願いをこめる短冊、神の前に出る自分を表す着物、長寿を祈る折り鶴、金持ちになるためのきん着、豊年豊漁を願う投げ網、そして清掃、節約を誓うくずかごだ。この七つのものが入っていなければ仙台の七夕飾りではない」(森権五郎「七夕飾りの見方」朝日新聞宮城地方版1960.8.7)。

一方、創意工夫を奨励した記事もある。例えば1954年の審査講評には次のような一文がある。

「正直に言って二、三の独創的なものを除いては例年とあまり変わりばえがなかった。金をか

けて豪華なものを作るばかりでなく、もっと創意工夫があってほしかった。来年は近代感覚とくに色彩などに心を遣ってもらいたい、仙台の七夕かざりが毎年同じものばかりでは見る人々から自然離れていく」（河北新報 1954. 8. 6）。

また、1951年には「古式」対「新式」の論争があったことが、「仙台七夕15年のあゆみ」と題した記事に記載されている。「(1951年)この年の話題は、七夕に先立って七夕祭協賛会と業者で『古式』『新式』の七夕論議がたたかわされたことだ。古式な飾りを商工会議所前に立てて観光客誘致に当たろうという協賛会の口火で出たものだが、この論議は結局当世風論者に押し切られてしまった」（河北新報 1960. 8. 6）。

また、七夕の期間中には必ずと言って良いほど雨が降ることから、雨対策として、色落ちする和紙ではなくビニールが好まれたという一面もあった。「仙台七夕は必ず雨がつきものと信じている商店はオール・ビニールのニュールック。しかも雨が降った場合にすぐ取り込みのできるように飾りの上げ下げに滑車付というのもあった」（河北新報 1954. 8. 6）。

「古式」と「新式」の葛藤は、1953年の次の記事からうかがえる。

「今年のニューファッションは、雨に痛めつけられる毎年の例から取り入れのやっかいな大物のくす玉にビニールの雨よけを被せたり、デコレーションの一つ一つをすぐ取り外せるように滑車でブラ下げたりするものが昨年よりずっと多くなった。これらとは反対に復古調のきざしも強く、仙台七夕があまり全国的になり、ローカル色が薄れたという反動から仙台ならではの古い伝統を強調、きらびやかなセロファンやビニールをしめ出して全部和紙だけの優雅な飾りで懐古的な風情を出し観光客の目を奪おうというもある」（河北新報 1953. 8. 4）。

こうした記事から判断するに、1950年代には、新しい材料も取り入れた「新式」の「創意工夫」が好まれる一方で、徐々に、伝統回帰とも言うべき傾向が見られるようになる。例えば1957年には「昨年にも増して花やかではあるがバタ臭いビ

ニールは影を潜め、全体的に落ち着いた感じ。日本紙の淡泊な色彩が復活したようだ」（河北新報 1957. 8. 6）とか、「ことしの七夕は昨年より淡泊、涼しそうで美しかったと好評なので、来年はもっと古典的な飾付けをしようという人も多く、いまから紙屋さんに古典的な染め紙を注文する」（河北新報 1957. 8. 10）といった様子であった。その結果、少し後になるが1962年の個人の部・特賞作品は、「仙台藩の御紋のほか、ボタン柄の着物を取り入れるなど伝統的なものの中に色彩も優雅なものにしたという苦心作」（朝日新聞宮城地方版 1962. 8. 9）といった、和紙で色彩を工夫したものが選ばれている。

こうした傾向は、他都市で盛んになった七夕を意識してのことと考えられる。例えば1953年には「今年の飾付は七夕が最近全国各地で催されるようになったので、その反動として仙台七夕独特の伝統を生かそうという機運が見られ、セロハンなどを使用、商業宣伝をかねたもののほかに雲龍紙（和紙）を用いた懐古的な飾付が相当出現するのではないかと予想されている」（河北新報 1953. 7. 10）。他都市との差を「伝統」で強調しようというのである。

なお、この時期には仕掛物が数多く作られている。「例年人気を集める商店街の仕掛物は一丈余りの大ちょうちんや二十メートル近い自由の女神をはじめ今年も三十余にのぼったが、これまでみられた世相をふうししたものは姿をひそめ牽牛と織女、一寸法師、舌切雀など古典落語に取材した伝統的なものが目立って多くなっていた」（河北新報 1950. 8. 12）であるとか、「仕掛物には『講和』を祝う着想が多く、万国旗の輪の中ではばたく平和の鳩、ダレス氏や吉田首相など講和をめぐる時の人のこけしなどは振り仰ぐ人々をほおませた」（河北新報 1951. 8. 6）といった記事から様子が見えてくる。ただ、仕掛け物の存在を仙台七夕の特徴とする考え方はなかったようだ。

竹飾り以外の行事

変化が少ない竹飾りだけでは飽きられると考えたためか、戦後は竹飾り以外の行事が増えていく。

1953年には「ミス七夕」を選出し（河北新報 1953. 7. 10）、翌年からは前日にミス七夕がオープンカーでパレードした（河北新報 1954. 8. 6）。また 1956年には、仙台駅頭で観光客を迎える「七夕織姫」を選んだ（河北新報 1956. 7. 26）。

また、この頃から前夜祭が始まったようである。1958年には「仙台七夕音頭」を作っただけでなく、前夜祭で伊勢神宮奉納民謡踊大会東北予選を開催した（河北新報 1958. 8. 3）。やがて民謡のパレードが始まり、1971年からの大がかりなパレード「動く七夕」へと発展していく。

こうした行事が始まった理由は、竹飾りが「伝統」を志向すればするほど変化が少なくなり、「マンネリ化」したことにあると思われる。それとともに、平塚など戦後始まった七夕祭りが、こうした行事を積極的に取り入れ、「商工祭」などとも内容の似た「夏祭り」化していったことに影響を受けた可能性も考えられる。

ここで、新しい七夕まつりの代表格である「平塚七夕まつり」について紹介しておきたい。神奈川県平塚市は、戦時中の空襲で大被害を受けたが、復興のめどがたった 1950年に「復興まつり」を開催した。この催しが好評であったため、翌年以降も何らかの行事を検討した結果、仙台出身の商工会議所副会頭の提案により、仙台を真似た七夕祭りを開催することになった〔平塚七夕まつり実行委員会 1981〕。復興まつりが先にあり、翌年から七夕まつりに模様替えしたという経過から、伝統とは無縁であったため、平塚では新しい集客の試みに積極的であった。すなわち、復興まつりの時からあったさまざまなステージ行事のほか、ミス七夕の選出（1951）、「平塚七夕音頭」（1952）「平塚恋しや」（1953）という歌と踊りの製作、写真コンクール開催（1953）、一戸一本飾りつけ運動（1955）といった試みを積極的に展開していく。直接的な影響関係は明らかにし得なかったが、こうした傾向を参考にした可能性もあることを指摘しておきたい。

平塚への対抗意識

平塚七夕まつりは、東京に近いという地の利か

ら観光客が急増し、また 1957年 7月 7日には『読売新聞』夕刊に 1面トップで紹介されるなど PR も巧みで、知名度はアップした。こうして関東随一の七夕という評価を固めていく。仙台でも、平塚の七夕が人気を集め、仙台のライバルに成長してきたことを意識している節が記事からうかがえる。

1957年には「仙台をしのごうとしている神奈川県平塚市の島村速雄市議ら十七人がこの日乗り込んで来て、見物案内の商工会議所職員はくすぐったような表情。島村氏の話によると、平塚で七夕を始めて七年になるが、金をかける七夕に傾いてきたので何か新しい思いつきはないものかと見に来たという。仙台七夕の印象は『飾りつけは平塚の方が豪華だが、仙台は飾りつける商店街の区域が広いですからね』とソツのない返事」（朝日新聞宮城地方版 1957. 8. 8）という記事がある。平塚では仙台七夕まつりを頻繁に視察していたことは、先に「他都市への普及」の項で商工会議所の視察に触れた折、平塚の名が見られることからもうかがえる。

1963年には、仙台博物館長の戸沢大作が次のように語っている。「平塚市の七夕は大変きれいだ—という人もいますが、あれは仙台市のマネをしたもので戦後栄えたから大胆な新型を出している。しかし仙台では『あのようになってはいかん』という人が多いようです」（朝日新聞宮城地方版 1963. 8. 4）。

観客数では、早くも 1956年に平塚が 130万人に達し、仙台の 120万人を追い越す（ただし祭りの期間は、仙台の 3日間に對し平塚は 5日間である）。その後しばらくは両者がほぼ同人数で、少なくとも観客数ではほぼ同レベルの関係が続く。

さらに、少し後になるが 1966年には、仙台の島野市長が平塚七夕まつりに招かれた。平塚側の「七夕まつり 15周年を記念して、仙台市長島野武氏を迎え、仙台市との親善を図り、ここに日本の『七夕まつり』は、名実ともに、その相互の位置を確定した観がありました」（平塚七夕まつり実行委委員会 1981：27）という記述からは、平塚が仙台と対等の位置に立ったという自負がうかが

えるのである。

一戸一本運動

昭和30年代には、市内の各戸が一本ずつ七夕を立てる「一戸一本運動」を主催者が市民に呼びかけた。「元来七夕まつりは、昭和初年までは仙台的各家々のまつりであった。大なり小なり思い思いに飾ったものが、戦後は繁華街の七夕が豪華になり、市の中心部や商店街の行事になってしまい、周辺地区ではそれを見物するだけになった。仙台七夕の特長は市民全体が七夕をまつることにあるのだから、市民全体のまつりでなければならない」〔仙台商工会議所七十年史編纂委員会1967：278〕ということであった。

一戸一本運動の開始は、仙台商工会議所の『七十年史』では1955年とされるが、仙台市の広報誌である『仙台市政だより』には「一戸一本飾りつけを呼びかけ」（1955.7.25号）とあるだけで、具体的な方策はわからない。一戸一本運動が『河北新報』紙面に登場するのは1958年からで、「少年少女の実行力を見込んで仙台七夕協賛会は、五日市内十七の小学校に合計三千本の青竹を届けた。配達には輸送訓練をかねた自衛隊のトラック二台が特別サービス。六年生が一本ずつ自宅に持帰り、先月渡された色紙で飾付け、一戸一本運動の先陣をつとめる」（河北新報1958.8.5）という力の入れようであった。なお、この年の成果について、「主催者が最も力を入れた竹飾りの一戸一本運動は市内の小学生に配った三千本を基礎にまざまざ成功。初日の朝、住宅街などで向こう三間両隣の市民達が繁華街の見物に出かける前に一本の竹を囲んでにぎやかに飾り付ける風景があちこちで見られた。数はまだ足りないとしても繁華街の『豪華けんらん』に対する息抜きとして町はずれのささやかな竹飾りは遠来の見物客からもかなり好評だったという」（河北新報1958.8.9）と、一定の評価をしている。しかしこの記事は「そうはいつでも、やはり中心は東一番丁と中央通の五彩のトンネル」と続いており、評価は一部分にとどまっているようである。

翌年は、前年より10万円多い40万円の予算で、

四千本の竹を配給した（河北新報1959.8.4）。さらに1960年になると、「神奈川県平塚市など全国に仙台七夕をまねるところが出て来たので、こちらは一戸一本運動で幅を広げようというのが最近のねらいだ。三日に各小学校を通じて四千二百本の竹飾り材料が配られたが、今年は荒巻、鹿野、高砂など周辺地区に重点を置いた。市の中央と周辺を一年おきにテコ入れする方針だという」（朝日新聞宮城版1960.8.4）という記事があり、この運動が他都市の七夕への対抗意識から、周辺地区にも行事を広げる意図があったことがうかがえる。

また、町はずれまで七夕を広げようと、主催者は盛んに飾り付けの勧誘をした。「市を挙げての祭典にするため三、四本程度の飾付けでもコンクールに参加を呼びかける。二日までにコンクール参加を申し出たのは一地区（中心部）で駅前商栄会、東一振興会など十一の町内会、二地区（その他の繁華街）で宮町商工会、北仙台商工振興会、長町マーケット組合など十の町内会。このほか東一番丁、二十人町などの仕掛物が七カ所ある。これだけでは去年までと同じ『繁華街偏重』になってしまうので、ことしから町内会単位の賞のほか個人賞を復活したのを機会に開催まぎわまで町はずれの商店街、住宅街に飾付けを勧誘する」（河北新報1958.8.3）。こうして、繁華街だけでなく、市を挙げての七夕を目指したのであった。

終了後の清掃

七夕終了後、かつては竹や飾りを広瀬川に流した、しかしこの頃にはそうもいかず、竹や飾り物の処理が問題になった。

「終了後どっと棄てられる竹筐や飾り物は莫大な量。しかも古くから行われている広瀬川に流すという習慣は、清掃法の禁止事項で取り締まられることになり、このため清掃課ではいまから対策に腐心しているが、一、河川や公共水面には絶対棄てないこと、清掃法で処罰される。二、できるだけ焼却してゴミ箱に捨てる量を少なくすること。などを市民に呼びかけることになった」（河北新報1954.7.26）という記事にあるように、この年の清掃法施行の影響があった。

1957年には「九日朝の繁華街は前夜の雨に打たれた飾りが舗道に散らばりはだかの竹ざおだけが立並んだ。午前七時から仙台市清掃課の小型トラック一台、大型トラック一台がゴミ集めに大わらわ。竹の葉が道路に散乱。くす玉が側溝に落ちていたり、後始末の悪さを清掃員は嘆いた。それでも昼近くなって各商店が後始末を始めたので、午後一時ころまでに繁華街の表通りは片付いたが、裏通りの空地はゴミの山、市のトラックは平日の二倍のゴミを運んだという」（河北新報 1957. 8. 10）という様子であった。

翌年になると、「仙台七夕祭協賛会では二日午後二時から七夕行事委員会を開いて雨の対策、一戸一本運動などを話し合い、次のような態度を決めた。（中略）後始末の清掃は市が引き受ける。九日中に飾付けの残骸を町内会ごとにまとめて置けば市清掃課がただで運んでくれることになった」（河北新報 1958. 8. 3）という予定であったが、「街路の汚れ方もひどく『これでは見物客に恥ずかしい』と青少年赤十字高校協議会の市内のメンバー約五十人が去年に続いて七、八、九の三日間毎朝六時から清掃奉仕をやり、市民から感謝されている。ことしは東一番丁ばかりか中央通、仙台駅前まで手を伸ばし、市清掃課の協力で仙一高、一女高など九校の男女高校生が“星くず”掃除に精を出した」（河北新報 1958. 8. 9）というように、高校生の奉仕活動も加わった。

こうして、行政が主体となり市民が協力する清掃方法が出来上がる。祭り終了後、ただちに日常生活が再開するわけであるから、「非日常」から「日常」に復帰するために、清掃は欠かせない手順である。行事を毎年滞りなく開催するために、清掃方法の確立は欠かすことのできない仕組みである。

4. おわりに

ここで、仙台七夕まつりの復活に見られる特徴をまとめてみよう。

まず、七夕の復活は1926年に大町五丁目が七夕を大売り出しの装飾に採用したことがきっかけ

になった。そして1928年に仙台商工会議所と仙台協賛会が行事に関与し、市内各町に参加を広く呼びかけた。これにより、各町独自に行っていた七夕が組織的に運営されることになった。以後、仙台商工会議所を中心に、仙台協賛会や河北新報社が「主催者」となっていく。主催者の確定により、祭礼のスムーズな運営が可能になった。

第2に、飾り付け競技会という審査・表彰制度を設け、町対抗の仕組みを作った。このことは町同士の競争を促進した。また個人競技も設け、創意工夫を競い合った。こうした競争が祭りを発展させたのである。以上2つの点から、ここに「都市祭礼」としての仙台七夕まつりが成立したと捉えることも可能であろう。

第3に、七夕まつりが有名になるにつれ、近隣だけでなく遠方からの観光客が増加した。これは1930年の国際観光局の設置など、国の観光政策が大きな影響を及ぼしていると推測される。1930年頃から臨時列車が増加し、県内だけでなく県外からの団体客がやってくるようになる。見せる行事としての七夕まつりが、観光資源として確立していった。

第4に、仙台での七夕まつりの成功が近隣の七夕を活性化させた。1931年の古川に始まり、塩釜などの宮城県内、さらには盛岡でも七夕を活発に行うようになった。

次に、1960年頃までの戦後の変化をまとめてみよう。

第1に、復興した七夕まつりは、ますます観光客の数を増やし、東京から団体客や臨時列車が来るようになった。毎年の観客数や経済効果が話題になり、集客イベントとしての性格が加わってくる。

第2に、仙台の七夕を模倣して関東以西に七夕が広まっていく。その結果、仙台のお株を奪うような行事も登場した。それが無視できないものになったため、仙台では「伝統」を強調することで差別化を図った。材料は和紙に戻し、「七つ飾り」を仙台の伝統として強調した。

第3に、竹飾りだけでは飽きられることから、ミス七夕の選出、仙台七夕音頭など、他の行事を

取り入れ始めた。これは他都市に比べて遠慮がちな導入に見えるが、1971年に始まる「動く七夕」パレードへとつながっていく。

第4に、繁華街の商業イベントではない、市を挙げての七夕まつりとするため、「一戸一本運動」が始まった。こうした試みは、その後も形を変えて継承されていく。

1962年、「東北三大祭」を見て回る最初の団体旅行が実施され、1964年から規模を拡大していく。1963年の観光基本法の制定から1964年の東京オリンピックを経た観光ブームの時期に、東北の「祭り観光」は新たな展開を遂げる。その時期の仙台七夕まつりについては、稿を改めて論じたい。

《注》

- (1) なお、従来は、七夕の復活を1927年とする記述が多かった。仙台七夕まつりを現在主催している「仙台七夕まつり協賛会」の事務局は仙台商工会議所に置かれているが、『仙台商工会議所百年史』[仙台商工会議所百年史編纂委員会1992]をはじめ、仙台七夕まつりの公式ホームページもこの説を採っている。しかし、1926年に七夕が盛大に行われたことは、以下に紹介する新聞記事からも明らかであり、『仙台市史 資料編』[仙台市史編さん委員会2004]の中でもこれらの記事が

紹介されている。また近江恵美子による最新の研究[近江2007]も1926年の七夕を紹介している。そこで本稿も1926年を一つの画期として記述を進めていきたい。

- (2) 仙台協賛会は、仙台観光協会の前身となる組織で、1935年に仙台観光協会と改称した。
- (3) 博覧会と七夕に直接の関連はないが、七夕が博覧会終了後の景気浮揚策と位置づけられた可能性はある。

参考文献

- 近江恵美子, 2007『仙台七夕まつり 七夕七彩』風の時編集部
- 斎藤弘之, 2003「安城七夕まつりの誕生とその原像—七夕「額」飾りの本質と昭和20年代の七夕ブーム」『日本の三大七夕—七夕「額」飾りの世界』安城市歴史博物館
- 仙台市史編さん委員会, 2004『仙台市史資料編7 近代現代3 社会生活』仙台市史編さん委員会
- 仙台商工会議所七十年史編纂委員会, 1967『七十年史』仙台商工会議所
- 仙台商工会議所百年史編纂委員会, 1992『仙台商工会議所百年史』仙台商工会議所
- 高橋綾子・初沢敏生, 2003「仙台七夕まつりの変容に関する一考察」『福島大学地域創造』15-1
- 田中宣一, 1983「七夕まつりの原像」『周期伝承』(「日本民俗研究大系」第3巻), おうふう
- 番丁詳伝編集委員会, 1987『番丁詳伝』一・四・一
- 平塚七夕まつり実行委員会, 1981『ひらつか七夕30年のあゆみ』平塚七夕まつり実行委員会